砲術家稲富一夢斎（祐直）について

慶長大火縄銃の花押「一夢」を残した稲富一夢斎についてのメモ。　　メモ）鉄本　2024.03.10

1. 出自

①出身地　丹後国田辺　　天文21年（1552）生～慶長12年（1611）没

②改名　　松寿丸　→　直家　→　祐直　→　一夢斎　　通称：弥四郎、伊賀守

③先祖　　祖父：　稲富祐秀（丹後一色氏の家臣）。佐々木少輔次郎義国から鉄砲術を学び、
「稲富流砲術」の基礎を築く。（天文23年（1554））

父：　稲富直秀（玄蕃頭）

2. 稲富一夢の来歴

①丹後攻防・本能寺の変　～主君一色氏の滅亡～

稲富氏の主君は一色氏であった。信長の命により細川藤孝が一色氏の丹後弓木城（京都府与謝郡与謝野町）を包囲する。明智光秀の仲介により、一色氏が丹後を分割することにより和平となり、一色氏は細川藤孝の与力となる。しかし、天正10年（1582）に本能寺の変が起ると、細川藤孝の謀略により一色氏は滅亡する。

②細川忠興への出仕　～**細川家の家老**となる～

稲富祐直は、羽柴秀吉の仲介で細川家の師範となる。慶長の役（1597年）では、細川隊の一員として朝鮮半島に渡海し、蔚山倭城に籠って活躍する。後には家老職にまで昇進。

③関ケ原の戦い　～**細川家から遁走**～

慶長5年（1600）に関ケ原の戦いでは、稲富祐直は、小笠原松斎、河喜多石見の老臣と共に、大坂玉造の細川屋敷に居て、忠興の妻である細川ガラシャ夫人の警護役に就いた。

石田三成が兵500名を送って屋敷を包囲し、ガラシャ夫人を人質として引き渡すように要求するも、これを拒否し、ガラシャ夫人が自尽し、小笠原、河喜多の両名も殉死した。稲富祐直は、老臣にありながら狼狽畏縮して殉じることができず遁走した。世人はその卑怯を嘲笑したという。

関ケ原の戦い後、細川忠興は祐直の不義に激怒し、見付け次第討ち果たすよう家中に命じた。

④井伊直政の庇護　～**出家し一夢と名乗る**～

身を隠すところが無くなった祐直は、砲術の弟子筋であった井伊直政に庇護を求め、その居城に身を隠した。井伊直政は同門の浅野幸長と共に、細川忠興に助命するようにと説得するも忠興は聴かず。徳川家康が稲富流砲術の技が絶えるのを惜しみ、忠興を宥めて祐直は助命された。

死を免れた祐直は剃髪し一夢と号し、忠興に謝した。

稲富一夢自画像
『稲富流砲術全書』慶長12年（1607）
出典：『火縄銃』所荘吉著　雄山閣

⑤幕府の鉄砲方　～**一夢の絶頂期**～

慶長8年（1603）家康の第四子忠吉（清須藩主）に招かれ直政の下を去り、食客となり2000石の知行を得る。

慶長13年（1608）に忠吉の死去後、家康は一夢を駿府に呼び部下に砲術を習わせた。これ以降、一夢は徳川幕府の銃砲政策について重要な役割を果たし、幕府の鉄炮方として近江の国友鍛冶集団を組織することも行った。

晩年は尾張の徳川義直（尾張藩初代藩主）に仕え、慶長16年（1611）駿府において没す。（享年61才）

⑥一夢の死後

一夢には男子がなく、長女の婿赤井秀治の長子秀明が稲富を名乗った。

・尾張藩砲術師範系譜： 祐直（一夢）―秀明（2000 石の知行）―秀隆―＊

＊―秀勝―秀栄―秀邦―秀密

・家督は一夢の弟直重が継いでおり、その子正直、孫直賢は旗本として徳川秀忠に仕え600石を領した。

・一夢の墓（供養塔？）は、京都府宮津市知恩寺にある。

施主は、羽柴丹後守高知（京極高知） （慶長16年建立）

京極高知（1572～1622）は丹後国宮津城城主（稲富流門下）

3. 稲富流砲術伝書

稲富流の伝書は「一返一流之書（11巻）」「極意書（9巻）」「大極意（5巻）」の**3部全 25 巻**で構成されている。伝書の内容は鉄炮の起源にはじまり、射撃の心得、得物による射撃姿勢、玉の種類、玉目による鉄炮の仕様、火薬原料の配合比率、照準具の矢倉の説明などが書かれている。

伝書に裸体で描いたのは、身体の各部の位置を理解させるためで、実際上の姿ではない。

①稲富流砲術を指南された諸大名

加藤清正、井伊直政、浅野幸長、京極高知、伊達政宗、松平忠吉、家康、秀忠ら

②慶長5年（1600）以前の伝書

慶長5年以前に他家に与えた伝書は、主君細川家を憚って「**稲留**（いなどめ）」としていた。

③慶長12年（1607）以後の伝書

慶長12年以降は家康に直属し、一夢の得意の様子が伝書にも現れ、豪華な伝書となっている。

右図は、稲富一夢が慶長15年9月に大久保藤十郎に授けた「一返一流之書」と「極意書」の 20 巻の奥書。

装丁は表紙が紺紙金銀泥、題箋は朱に金泥、見返しは花菱文を浮かせた金箔押しと豪華。

また筆蹟は当代一流の書家の手になるものであり、絵画の部分は狩野派の絵師が絵筆をふるい、贅を尽くしている。

出典： 国立歴史民俗博物館

左図は慶長18年（1613）に野間喜左衛門尉重秀が渡辺三郎兵衛に伝授した稲富流砲術の秘伝書。

出典： 九州国立博物館

4. その他の砲術流派

初期には 10 家ほどであったが、幕末近くにあると200家にも及ぶ流派の数になった。

①津田流　（流祖）**津田監物算長**―（長男）津田算正―監物重長―荘左衛門重信―太郎左衛門算長
―（次男）津田明算（自由斎　後に自由斎流を開く）

永禄年間（1558～1570）に秘伝書が作成された。 津田監物算長は橘姓。

＜津田氏由緒＞

津田村尊光寺所蔵の「国見城主歴代略縁」、『紀伊続風土記』によると以下の通り。

楠木正成～～四代孫～～（河内国交野郡）津田城主津田周防守正信―津田備後守正忠―
―津田周防守正明（*1）―津田主水頭正時（*2）―津田監物重長―（長男）**津田監物算長**

＊1：津田正明は三好長慶に仕え、津田地区（現枚方市東部）、牧八郷（枚方市中西部）、
友呂岐六郷（寝屋川市北部）を所領し、一万石を支配したと言われる。

＊2：津田正時の時、織田信長に津田城を焼かれ、山崎の合戦で明智方に付いたため没落。

（注）津田城の由緒や津田城主の津田氏は後世の創作という指摘がある。

②井上流（外記流）　（流祖）**井上外記正継**（播州英賀の城主井上九郎左衛門正信の孫）

正継は慶長19年（1614）に砲術をもって徳川秀忠に仕え、寛永12年（1635）に幕命により
新式の大筒100挺余り製造した。この新式大筒は、南蛮銅を使った3貫目筒で、操作が
簡単で命中精度も高かった。　（注）3貫目は鉛弾径 122.836mm、銃口径 125.29mm。

正保3年（1646）に、殿中にて井上外記と稲富直賢が鉄砲のことで口論となり、**刃傷沙汰**を
起こしている。井上外記は、一旦は長坂丹波守の仲裁により稲富直賢と和解するも、その直後
言葉の行き違いで立腹し、長坂丹波守と稲富直賢を切りつけ死に至らしめている。

外記は、駆け付けた家来衆によって討ち取られた。嫡子が召され井上流は幕末まで続いた。

③その他の諸流派　田付流（田付兵庫助景澄）、関流（関八左衛門文信）、一火流（泊兵部少輔一火）、
一二斎流（藤井河内守一二斎）、岸和田流（太田新之充）、荻野流（荻野六兵衛安重）、
天山流（坂本孫八郎俊豈）、など多数あり。

【参考文献】

・『火縄銃』 所荘吉著　雄山閣　2020
・『火縄銃の伝来と技術』 佐々木稔編　吉川弘文館　2003
・『日本銃砲の歴史と技術』第 2 版　宇田川武久編　雄山閣　2022
・Wikipedia